氏　　名	松村朋彦（まつむらともひこ）

（論文内容の要旨）

本論文は、近代ドイツ文学における異文化像を、モティーフ史の観点から考察したものである。全体は、序章と本論７章および終章から成っている。

序章「切り取られた耳」では、18世紀ドイツ文学における日本像が取り上げられている。マティアス・クラウディウス（1740-1815）は、エンゲルベルト・ケンペル（1651-1716）の『日本誌』（英訳版1727、ドイツ語版1777/79）に触発されて、『日本皇帝拝謁記』（1778）と題する小品を発表する。支配者のあるべき姿を示す「君主の鑑」としてのこの作品で描かれる日本は、啓蒙と啓蒙批判、ヨーロッパ中心主義とその自己反省とのせめぎ合いが演じられる舞台なのである。エドワード・サイード（1935-2003）は、『オリエンタリズム』（1978）のなかで、西洋人によって構築されたオリエント像をきびしく批判した。だが、クラウディウスのこの作品は、ドイツ文学におけるオリエント像が決して一面的なヨーロッパ中心主義の産物ではなかったことを示している。本論文は、サイードの問題提起を批判的に受けとめて、18世紀後半から19世紀前半にかけてのドイツ文学を、異文化への越境と自文化への内省という二つの側面から読み直す試みである。

第１章「イギリス旅行者たち」では、18世紀後半のイギリスを旅した三人のドイツ人たちが残した記録を通じて、この時期に起こった世界認識の変容の過程が、旅行記という文学ジャンルの成立と関連づけて考察されている。1770年代にイギリスに滞在したゲオルク・クリストフ・リヒテンベルク（1742-99）は、迷宮としての大都市ロンドンでの体験を断片の形で旅日記や手紙に記録するが、それを一つの全体へとまとめあげるにはいたらない。カール・フィリップ・モーリッツ（1756-91）は、『1782年のあるドイツ人のイギリス旅行』（1783）の中で、徒歩旅行者の視点からイギリスを描き出すが、まさにその視点のゆえに、広大な自然の風景と人間社会の悲惨とは互いに関係づけられることなく、彼自身の内面へと収斂して行く。ゲオルク・フォルスター（1754-94）は、1790年にライン川下流地方からベルギー、オラン

ダを経てイギリスへ渡り、フランスへ戻る旅行を行い、『ニーダーラインの景観』（1791/92）を刊行する。世界を意味に満たされたものとして捉え、表層から深層を、空間から時間を、現在から未来を読みとこうとする彼のまなざしの前で初めて、イギリスはその全体像を現し、フランス革命へと向かう歴史過程の中へと位置づけられる。だが同時にまた、革命下のパリで失意と孤独のうちに死を迎える彼の運命は、こうした新しい旅行記のスタイルが、その成立の時点においてすでに崩壊の危機をはらんでいたことを物語っているのである。

第２章「ローマのカーニヴァル」では、異文化としてのイタリアのカーニヴァルが、ドイツ文学の中に受容されて行く過程が跡づけられている。自文化の視点から異文化を裁断した父ヨーハン・カスパル・ゲーテ(1710-82)とも、異文化との一体化によって対象からの距離を失ってしまったモーリッツとも異なり、ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ（1749-1832）は『ローマのカーニヴァル』（1789）において、異文化をあくまでも異文化として捉えたうえで、カーニヴァルの混沌に秩序と形式を与えようと試みる。フランス革命前夜のローマでカーニヴァルのはらむ民衆のエネルギーを感じとったゲーテは、それを市民的秩序の領域へと取り込もうとしたのである。『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』に登場するイタリア生まれの少女ミニョンもまた、カーニヴァルの世界と深くかかわっている。異物としてのミニョンを古典主義的な秩序の中へ取り込もうとする試みを繰り返し描き出すことによって、この小説はドイツ古典主義のマニフェストであると同時に、それに対するロマン主義の側からの批判をすでに先取りしているのである。それに対してE. T. A. ホフマン(1776-1822)は、ローマのカーニヴァルを舞台にした小説『ブランビラ王女』（1821）において、カーニヴァルの原理を作品の根底にすえる。ここではカーニヴァルにおける仮装と演技は、古い自我を解体し、新しい自我を生み出すための装置となる。それゆえ、『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の筋書きを逆にたどるかのように、この作品の主人公ジッリオとジャチンタはコメディア・デラルテの俳優夫妻へと変貌をとげるのである。

第３章「暴君から賢者へ」では、サイードが「オリエント化されたオリエント」

として批判した「オリエント的専制」のモティーフが、18世紀のドイツ語圏の文学とオペラにおいて果たした役割が検証されている。クリストフ・ヴィリバルト・グルック（1714-87）のオペラ『トーリードのイフィジェニー』（1779）に登場するスキタイの王トアスが、「暴君」としてギリシア人たちに打ち殺されるのに対して、ゲーテの『タウリスのイフィゲーニエ』（1779/87）のトーアス王は、ヨーロッパの支配者に差し出された「君主の鑑」としての性格をおびている。彼はイフィゲーニエの「真実の声」に耳を傾けるばかりか、ギリシア文明が自らの内にはらんでいる野蛮を暴き出す。ゴットホルト・エフライム・レッシング（1729-81）は、『賢者ナータン』（1779）において、寛大なスルタンを不寛容なキリスト教徒に対置すると同時に、西洋と東洋、キリスト教とイスラームという二項対立の間に、西洋のうちなる他者としてのユダヤ人を「賢者」として登場させる。『ツァイーデ』から『後宮からの誘拐』を経て『魔笛』へといたるモーツァルトのジングシュピールは、オリエントの君主像の「暴君」から「賢者」へ、「オリエント化されたオリエント」から「西洋化されたオリエント」への転換を示している。だが、フランス革命後のヨーロッパでは、こうした啓蒙の構図に亀裂が走る。ゲーテは『エピメニデスの目覚め』（1815）と『西東詩集』（1819）において、ナポレオンと「オリエント的専制」のモティーフを重ねあわせる。ここではオリエントは、「君主の鑑」からヨーロッパの現実を映し出す鏡へと変貌するのである。

第４章「根源としての東方」では、ヨーロッパ文明の根源としての東方というモティーフが、18世紀後半から19世紀前半にかけてのドイツ文学の中で変容をとげてきた過程が追跡されている。ヨーハン・ゴットフリート・ヘルダー（1744-1803）からフリードリヒ・シラー（1759-1805）を経てノヴァーリス（1772-1801）、フリードリヒ・シュレーゲル（1772-1829）へといたる文学者たちの著作にあらわれるオリエントのイメージは、旧約聖書の世界からエジプト、イスラーム世界を経てインドへと拡大して行く。だが同時にまたそれは、オリエントがヨーロッパのうちに取り込まれて行く過程でもあった。それに対して、ゲーテは14世紀ペルシアの詩人ハーフィスとの対話から生まれた『西東詩集』において、「オリエントのオリエント化」と

も「オリエントの西洋化」とも異なる「自己のオリエント化」によって、異文化への越境を試みる。こうして、ゲーテ時代のドイツ文学におけるオリエント像は、西洋近代オリエンタリズムの成立と歩みを共にする一方で、その自己反省の試みでもあったのである。

第５章「ゲーテとアメリカ」では、晩年のゲーテのアメリカ像が取り上げられている。1810年代以降ひんぱんにヴァイマルを訪れたアメリカ人たちや、数多くのアメリカにかんする書物、そしてとりわけ1825年から26年にかけてアメリカに滞在したヴァイマル公子ベルンハルトの旅日記を通じて、ゲーテは当時のドイツでアメリカの事情に最もよく通じた人物の一人だった。だが、『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』（1829）の中に遍歴者たちの移住先として描かれるアメリカは、現実のアメリカに精通すればするほど、文学の中のアメリカがその現実性を失って行くというパラドックスを示している。当時のアメリカが、機械文明を謳歌する先進産業国家であったのに対して、この小説のアメリカ移住者たちを一つに結びつけているものは、機械化とは正反対の「手仕事」の理念にほかならない。またそこでは、宗教と家父長的秩序が重んじられる一方で、ユダヤ人が排斥され、多数決の原理が否定される。だが、この作品のアメリカ像が示しているこうした矛盾は、同時代のヨーロッパの社会がはらんでいる矛盾であり、ゲーテ自身の時代認識がはらんでいる矛盾でもあった。ゲーテにとってアメリカとは、ヨーロッパが自分自身を映し出す鏡にほかならなかったのである。

第６章「インクルとヤリコの子供たち」では、ヨーロッパ人男性とアメリカ先住民女性との間の悲恋の物語である「インクルとヤリコ」のモティーフが、18世紀以降のドイツ文学の中で変容して行く過程が跡づけられている。イギリスの文人リチャード・スティール（1672-1729）によってヨーロッパ中に広まったこのモティーフは、18世紀のドイツ語圏ではクリスティアン・フュルヒテゴット・ゲラート（1715-69）、ヨーハン・ヤーコプ・ボードマー（1698-1783）、ザロモン・ゲスナー（1730-88）といった作家たちに受けつがれる。そこではこの物語は、ヨーロッパ文明の自己批判であると同時に、他者としての新世界を自己のうちに取り込もうとする試みでもあっ

た。19世紀に入るとこのモティーフは、インクルとヤリコの子供たち、二つの世界の間に引き裂かれた混血児たちの物語へと変形される。ハインリヒ・フォン・クライスト（1777-1811）の『サント・ドミンゴの婚礼』（1811）、ヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフ（1788-1857）の『航海』（執筆1835頃）、テーオドア・シュトルム（1817-88）の『海の彼方より』（1867）という三つの作品は、ヨーロッパが非ヨーロッパ世界へと向けてその勢力を拡大して行く歴史過程を映し出すと共に、そうした歴史に対する文学の側からの自己反省をなしている。そして、20世紀のドイツ文学においても、このモティーフはさらに引きつがれて行くのである。

第７章「探検家たちと思索家たち」では、18世紀後半から19世紀前半にかけて、探検家たちと思索家たちとの間に交された対話の諸相が考察されている。ゲオルク・フォルスターの『世界周航記』（1777，1778/80）からアレクサンダー・フォン・フンボルト（1769-1859）の『新世界赤道地方紀行』（1814-31）を経てアーデルベルト・フォン・シャミッソー（1781-1838）の『世界周航記』（1836）へといたる探検旅行記の変遷からは、経験的事実の尊重と世界の全体像の探究、文化の多様性を認める相対主義と人間本性への信頼にもとづく普遍主義の統合をめざしたフォルスターの「哲学的旅行記」が、自然科学と文学の両極へと分断されて行く過程が見てとれる。だがその一方で、1780年代後半のイマヌエル・カント（1724-1804）とフォルスターとの間の人種論をめぐる論争、ゲーテの『親和力』（1809）におけるフンボルトへの言及、そしてシャミッソーの世界周航に触発されて書かれたE. T. A. ホフマンの小説『ハイマトカーレ』（1819）は、探検家と思索家との間の対話が、ヨーロッパ中心主義に対する自己反省の契機となっていたことを物語っているのである。

終章「ゲーテと＜世界文学＞」では、1820年代後半のゲーテによる「世界文学」の構想のもつアクチュアリティーが再検討されている。ゲーテの異文化受容の頂点をなす『西東詩集』が、ヨーロッパの現実からの逃走の試みであったのに対して、国境を越えた文学の相互交流としての「世界文学」の理念は、同時代のヨーロッパ文学との対話から生まれたものだった。異文化を表象するという行為が、それ自体の内に支配と暴力をはらんでいたとするなら、ここでは異文化は自文化を映し出す

鏡となり、自文化に対して絶えざる自己反省をうながすのである。ゲーテの「世界文学」は、異文化への越境と自文化への内省との間を往還しつつ、文化の固有性をおびやかす世界のグローバル化という同時代現象を逆手にとって、文学の新たな可能性を救い出そうとする大胆な賭けだった。そして、ゲーテが呼び出した「世界文学」の行方は、世界のグローバル化が新たな局面を迎えた現代の我々の手にゆだねられているとされ、論は結ばれる。

氏　　名	松村朋彦（まつむらともひこ）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、18世紀後半から19世紀前半にかけての近代ドイツ文学における異文化像を、モティーフ史の手法を用いて探求したものである。西洋において構築されてきたステレオタイプとしてのオリエント像を批判したサイードの著作が著されて以来、その問題提起を受けとめてドイツ文学におけるオリエント像を再検討しようとする試みは、まず英米の研究者によって始められた。ドイツ本国におけるこのような傾向の研究は、まだ緒についたばかりである。また「インターカルチュラリティー」や「ポストコロニアリズム」の観点からドイツ文学における異文化像に新たな光を当てようとする試みも、ここ十年ほど前から始まったにすぎない。本論文は、このような最近の新しい研究動向を十分に踏まえたうえで、なおかつそれにとらわれることなく独自の知見を示そうとしたものである。

本論文は、序章と本論７章および終章から成る。序章「切り取られた耳」においては、18世紀後半のクラウディウスの作品に、啓蒙と啓蒙批判、ヨーロッパ中心主義とその自己反省とのせめぎあいの場として日本が登場することが指摘される。ドイツ文学におけるオリエント像が決して一面的なヨーロッパ中心主義の産物ではなかったということが、まずこの序章において示されている。

第１章「イギリス旅行者たち」では、18世紀後半のイギリスを旅した三人のドイツ人たちが残した記録を通じて、この時期に起こった世界認識の変容の過程が、旅行記という文学ジャンルの成立と関連づけて考察されている。第２章「ローマのカーニヴァル」は、異文化としてのイタリアのカーニヴァルがドイツ文学の中に受容されて行く過程を、ゲーテならびにその父、およびホフマンの作品を通して跡づけたものである。第３章「暴君から賢者へ」では、ステレオタイプ化したオリエント像の典型と言える「オリエント的専制」のモティーフが、18世紀ドイツ語圏のゲーテやレッシングの戯曲、ならびにグルックやモーツァルトのオペラにおいて果たした役割が検証されている。

第４章「根源としての東方」では、ヨーロッパ文明の根源としての東方というモティーフが、18世紀後半から19世紀前半にかけてのドイツ文学の中で変容をとげた過程が跡づけられている。ヘルダー、シラー、ノヴァーリス、フリードリヒ・シュレーゲルの著作が扱われた後、14世紀ペルシアの詩人との時空を超えた対話から生まれたゲーテ晩年の『西東詩集』が取り上げられる。ゲーテ時代のドイツ文学におけるオリエント像は、西洋近代オリエンタリズムの成立と歩みを共にする一方で、その自己反省の試みでもあったと結論される本章は、質量共に本論文の中心とみなせる章である。

第５章「ゲーテとアメリカ」では、ゲーテ晩年の小説『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』の読解を通して、ゲーテにとってのアメリカとは、ヨーロッパが自らを映し出す鏡にほかならなかったことが論じられている。第６章「インクルとヤリコの子供たち」では、ヨーロッパ人男性とアメリカ先住民女性との間の悲恋の物語である「インクルとヤリコ」のモティーフが、18世紀以降のドイツ文学の中で変容して行く過程が跡づけられている。扱われる作家は、18世紀のゲラートから始まり、クライスト、アイヒェンドルフ、シュトルムを経て、現代の作家にまで及んでいる。第７章「探検家たちと思索家たち」では、18世紀後半から19世紀前半にかけての、フォルスター、アレクサンダー・フォン・フンボルト、シャミッソー等が残した旅行記が、カントの論説やホフマンの小説と対比して考察され、探検家と思索家との間の対話が、ヨーロッパ中心主義に対する自己反省の契機となったということが指摘されている。

本論の後に置かれた終章「ゲーテと〈世界文学〉」においては、世界のグローバル化が新たな局面を迎えた現代においてゲーテによる「世界文学」の構想の持つ意義が、再評価されている。現代につながる問題として過去の文学を論じる本論文全体に通じる姿勢が、最もよく読み取れる章である。

近代のドイツ文学に見られる異文化像の諸相を詳しく探り、基本的な傾向として、異なる文化への越境が同時に自らの文化への内省でもあったとする本論文は、引用文の訳文からも窺える精緻な読解に基づく達意の文章による手堅い論証を通して、

強い説得力を有している。いたずらに自説の新しさを強調せず、先行研究にも十分留意された論調の中で、本論文には随所に斬新な解釈や鋭い指摘が見られる。それぞれの章の構成も、よく考え抜かれたものである。ゲーテの文学を中心として、彼と同時代の非常に多くの作家と作品を論じた規模の大きさも、論者の長年にわたる研究の蓄積を窺わせる。これらの点から、本論文はきわめて高く評価できる。

本論文で対象とされたドイツ語圏と関わりを持つ国や地域は、ヨーロッパの近隣諸国から始まり、太平洋の諸島にまで及んでおり、近代ドイツ文学における異文化像を論じるうえで不足はない。ただしあえて要望するならば、本論文で扱われなかった国や地域についても、今後論者によるさらなる論の展開を期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2009年１月19日、調査委員３名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。